The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	華北ムスリム知識人にとっての義和団事件 : 教育・宗教改革への影響を中心に
Author(s)	海野, 典子
Citation	人文学林. 2025, 2, p. 37-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100778
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

華北ムスリム知識人にとっての義和団事件

―教育・宗教改革への影響を中心に―[1)]

海　野　典　子

The Boxer Rebellion for North China's Muslim Intellectuals: Its Influence on Educational and Religious Reforms

UNNO Noriko

Abstract

This paper examines the influence of the Boxer Rebellion on educational and religious reforms among Sino-Muslims in North China by comparing how Muslim communities in Beijing and Tianjin responded to this incident and grappled with its traumatic legacy. Muslim reformists in Beijing used the turmoil as an opportunity to enhance their prestige, gain support from the Ottoman Empire for their educational reforms, and promote their campaigns against superstitions. Circumstances were different in Tianjin, where a Muslim village had been attacked and where Muslims were frustrated with the Qing government that had allowed western countries to dominate the city. There, Muslim elites called on their coreligionists to obey the Qing and Tianjin authorities and avoid friction with non-Muslims. It can be inferred that the fear of violence felt during the incident led to differences in the attitudes and behaviors of Muslims in the two cities.

キーワード：義和団事件，華北地域，回民（ムスリム）

はじめに

19世紀末，山東省から興った義和拳教（白蓮教の流れを汲む秘密結社）の徒が，自然災害に伴う民衆の困窮，キリスト教排斥（教案）と列強の帝国主義的な進出への反発を背景に勢力を拡大し，キリスト教撲滅と外国人排斥を唱えて蜂起した。西太后ら清政府内の守旧派は，義和拳を列強や李鴻章ら洋務派への対抗勢力として利用するために義和団と改称させ，団練（農村部の武装自警組織）に組み込んで公認しようとした。清政府の後ろ盾を得て勢いづいた義和団

1）本稿は，以下の口頭発表の内容を大幅に加筆修正したものである：“Violence, Fear, and Patriotism: Muslim Reactions to the Boxer Rebellion in North China,” AAS-in-Asia Conference, Association for Asian Studies（July 11, 2024）.

は，「扶清滅洋」（清を扶け，洋を滅ぼす）をスローガンに中国北方の広域でキリスト教会や信者，外国人を襲撃したほか，鉄道・電線を破壊して回り，1900年6月には北京に侵入。しかし，列国大公使館区域の包囲攻撃，日本とドイツの外交官殺害，さらには清政府による宣戦布告を受けて，日本・イギリス・アメリカ・ロシア・フランス・ドイツ・イタリア・オーストリアの8ヶ国連合軍が出兵し，同年8月までに北京を占領して暴動を鎮圧した。西太后と光緒帝が西安に逃れるあいだ，講和に臨んだ李鴻章は，1901年9月に北京議定書（辛丑和約）に調印。結果，中国の半植民地化がさらに進行した。また，事変の最中，義和団鎮圧と東清鉄道保護を名目に満洲を占領したロシアが事変終結後も撤兵を拒んだことは，日露戦争の遠因となった。以上が，北清事変，団匪事件，拳匪事件などとも呼ばれる義和団事件のあらましである[2)]。

中国北方を混沌の渦に陥れ，世界に衝撃を与えた義和団が主な標的としたのは，繰り返しになるが，外国人や教会，中国人のキリスト教信者であった。他方，外国とのつながりを疑われた華北地域の回民，すなわち漢語を話すムスリム――7～14世紀頃に来華した西アジア・中央アジア・東南アジア出身のムスリムの末裔で，中華人民共和国の少数民族の一つとして認定されている回族にほぼ相当――がこの騒擾に巻き込まれたことは，ほとんど知られていない[3)]。その理由として考えられるのは，第一に，民衆史や地方史の文脈で行われてきた義和団事件に関する研究の多くが，回民について書かれた史料や回民自身が残した記録を用いていないためである[4)]。第二に，利用可能な漢語の一次史料が他の時期に比べると少ないこともあってか，中国ムスリム史上における清朝末期から中華民国初期の重要性が十分に認識されてこなかったためでもある。清代のイスラーム学者の思想的営為や19世紀後半に雲南・西北地域で発生したムスリム反乱の顛末，中華民国期（特に1920–40年代）の回民知識人の文化活動やナショナリズム言説についての豊富な研究蓄積が見られるのとは対照的に，清末民初期（1900–10年代）の回民の状況に関する研究は不十分であると言わざるをえない[5)]。

清末民初は，中国ムスリム史の転換点となった時代である。中国各地，とりわけ北京と天津の回民コミュニティで，「民族」や「宗教」といった日本語から漢語に紹介された概念に関する議論が沸き起こる[6)]とともに，中国社会におけるムスリムの地位向上を目指す両都市の回民知

2）義和団事件に関する代表的な研究には，（Esherick 1988）（Bickers and Tiedemann 2007）（佐藤1999）などがある。

3）ただし，義和団事件に関する先行研究の大半は漢語史料に依拠しており，ヨーロッパの諸言語で記述された教会側の史料が十分に分析されていないため，義和団事件前後のキリスト教の状況についても今後議論すべき点が多く残されているという指摘（蒲2016: 414–411）がある。

4）例外的に（吉澤2002）は，本稿が取り上げる天津出身の回民ジャーナリスト，劉孟揚の著作をも用いて，義和団事件を含む近代天津の社会変動に対する民衆の反応を多角的に描いている。

5）この傾向については，すでに（Unno 2018: 12）が一部指摘している。清末民初期の回民社会の実情を知るための漢語史料の少なさは，回民と交流のあったキリスト教宣教師，オスマン帝国やロシア帝国出身のムスリム，日本の軍人やジャーナリストが残した報告書・定期刊行物・旅行記などによってある程度補うことができる。これらの史料を活用した研究として，（Yamazaki 2014）（Yamazaki 2018）（Unno 2018）（海野2021）が挙げられる。

6）近代回民知識人の「民族」「宗教」概念に関するさまざまな議論については，（松本1999: 288–295）（王2006: 115–156）（Cieciura 2016）などを参照。これらの先行研究が明らかにしているように，回民の「民族」「宗教」論に先鞭をつけたのは，明治日本に留学していた36名の回民青年たちが東京で結成した留東清真教育会の機関誌『醒回篇』（アラビア語タイトル *Istīqāẓ al-Islām*）所収の諸論文であった。

識人（アホンと呼ばれる宗教指導者[7]，ジャーナリスト，教育家，実業家）が宗教・教育改革を推進するなかで，清・民国政府のみならずオスマン帝国や日本との関係を深めていった。この時期に華北の回民知識人が進めた改革や諸外国との交流は，1920年代後半以降に本格化する回民の近代化運動の基盤をつくるとともに，中国内外の諸勢力による回民を対象とした懐柔工作を準備したという点において，重大な意味を持つ[8]。

そこで，本稿は，清末民初の回民知識人の改革思想や諸活動，彼らとオスマン帝国の関係に少なからず影響を及ぼしたにもかかわらず，これまで中国ムスリム史の文脈でほとんど言及されることのなかった義和団事件に注目する。議論の流れは以下のとおりである。まず，19世紀末から20世紀初頭の華北回民社会の状況を整理したあと，義和団事件への対応が北京の回民指導者層の名声を高めたことを示すとともに，義和団事件を機に始まったオスマン帝国と回民の交流が，すでに機運の高まっていた回民の宗教・改革運動の推進力となった経緯を述べる。最後に，義和団による回民コミュニティ襲撃，および暴動を鎮圧した列強諸国の勢力伸張に対する天津の回民知識人の反応を分析し，北京の事例と比較する。そうすることによって，改革派の回民知識人のあいだに政治や宗教をめぐる意見の相違があったこと，また義和団事件が間接的にこうした意見の対立をもたらした可能性があることを指摘する。

本稿は，改革運動への問題関心と後述する史料の制約から，義和団事件の最中に何が起きたのかを解明することよりも，同事件が「改良家」（改革派）と自称した回民知識人の思考や教育・宗教改革の進展に与えたインパクトの考察に重きを置く。改革派回民知識人にとっての義和団事件の意味を検討することによって，中国ムスリム史研究の空白期間と言える20世紀初頭の回民社会の諸相を明らかにするとともに，マイノリティの視点から中国における近代化，宗教，ナショナリズム，暴力，帝国主義と植民地主義を再考するための材料を提供したい。

主な史料として用いるのは，改革派の回民ジャーナリストが北京・天津で発行した定期刊行物や書籍である。具体的には，北京出身の丁宝臣（1876–1913）が主宰した日刊紙『正宗愛国報』（1906–13）[9]，天津出身の劉孟揚（1877–1943）による義和団事件の記録『天津拳匪変乱紀事』（1910）など。改革に反対する人々への否定的な論調が目立つ前者にしても，劉の個人的な体験や伝聞に基づく後者にしても，回民社会全体の声を代表しているわけではないし，著者による事実誤認と思しき記述も散見される。だが，主観性の高い史料であるからこそ，当事者

7）アホン（漢語では阿訇，阿衡，阿洪などと表記）は，「イスラーム諸学を修めた者」を意味するペルシア語（ākhund）に由来する。

8）清末民初の華北地域における回民の教育改革とその意義については，（海野 2021）に詳しい。20世紀前半に中国各地で展開された対回民宣撫工作について多くの研究があるなかで，1900～20年代の北京における対回民宣撫工作に関する研究として（Yamazaki 2014）（海野 2022a）が挙げられる。

9）『正宗愛国報』をはじめ，本稿で用いる定期刊行物の発行日は新暦・旧暦の両方で書かれている場合があるが，本稿では新暦のみ表記する。また，署名記事に限って，記者や寄稿者の名前を明記する（『正宗愛国報』の無署名記事，特にイスラーム関連のものの大半は，丁宝臣が執筆・編集したものである可能性が高い）。なお，筆者が使用したマイクロフィルム（正宗愛国報社 1987）に所収されていない1906～07年刊行の号の一部は，故・張巨齢氏の個人的コレクションを撮影し利用を許可していただいた。だが，そのなかには複数の頁が散逸し，号数不明のものもある。同紙引用の際，一部の記事についてやむをえず号数不明と書いたのは，こうした事情による。

の生々しい感情を理解する上で役立つ点も多いだろう。

近年，こと民族・宗教問題に関する中国でのフィールドワークや文献調査は，厳しさを増す一方である。中国国外の研究機関でも閲覧可能なこれらの史料を活用することは，こうした現状を打開する糸口の発見にもつながるはずである。

1. 清末華北回民社会の状況

1.1. 歴史概観

清末民初に多くの回民知識人が活躍した北京には，10～13世紀頃，中央アジアや中国の他地域からやってきたムスリムが定住しはじめた[10]。明清代になると，江南地方や陝西・甘粛・山東出身の回民が現在北京市最大のムスリム集住区として知られる牛街のあたりに居を構え[11]，モスクを中心として独自のコミュニティを発展させていった。20世紀初頭には，北京中心部の回民の人口は十数万，モスクの数は30～40を数えたという[12]。

本稿のもう一つの舞台である天津に初めて定住したムスリムは，14世紀初頭に元朝が駐屯させた中央アジア出身の兵士だと言われている。明代には，安徽・河南・河北出身の回民商人や船乗りが現在の西北角エリア（虹橋区北西部）に移住し，コミュニティを形成。清が英仏に敗北を喫したアロー戦争の結果，1860年に天津港が外国に開放されると，新たなビジネスチャンスを求めて山東・河北・北京から多くの回民がやってきた[13]。1920年代初めには，天津とその近郊に13のモスクが存在し，2万世帯の回民が暮らしていたらしい[14]。

かくして北京・天津をはじめ中国各地にイスラーム文化を根づかせたムスリムであったが，彼らは非ムスリム（主に漢人）や時の政治権力によって，しばしば偏見と抑圧の対象とされてきた歴史がある。ムスリム反乱やスーフィー（神秘主義）教団間の抗争が頻発した清代には，法的に不当な扱いを受けることもあった。たとえば，「回」（ムスリム）に獣偏を付した漢字や「回匪」「回賊」などの蔑称が公文書のなかで使われ，罪を犯した回民が漢人の罪人より厳しく裁かれることもあったという[15]。19世紀後半に西北地域と雲南でムスリム反乱が発生した際は，遠く離れた北京でも回民による武装蜂起への警戒心が高まる[16]など，回民全体を反逆者と見なす風潮が蔓延していたようだ。さらに，ムスリムと非ムスリムが混住する北京・天津など華北地域の諸都市では，豚肉食や飲酒の忌避といった食習慣の違いをめぐる両者間の衝突がたびた

10）（姜・富・羅 1995: 174）（李 2004: 66）（良 2006: 51–52）
11）（王 2010: 70）
12）（Broomhall 1966（1910）: 200–201, 215）（Hartmann 1913: 185）（Naquin 2000: 213–214, 573）（馬 2014: 544–545）
13）（劉 2007: 84–87）
14）（Rhodes 1921: 63）
15）こうした清代回民の不安定な法的地位については，（Lipman 2006）を参照されたい。
16）（Naquin 2000: 574）

び発生したことから，一般的に世間の回民に対する視線は冷たく，回民は強烈な被差別意識を抱いていた[17]。

1.2. 改革運動の進展

19世紀末から20世紀初頭，中国社会におけるムスリムの不安定な立場に危機感を抱く北京・天津・上海・鎮江・成都・奉天などの回民知識人たちが，回民の教育・経済水準の向上を唱えて立ち上がった。彼らは，宗教知識やアラビア語読解法しか教えず，漢文学習を軽視してきた伝統的な教育方法，すなわち宗教的知識人（「念経的」，経典に通じた人）を育成するための経堂教育[18]に限界を感じていた。そこで，歴史・地理・数学・商業・法律などの近代的知識や漢文典籍の教養を身につけ，現実問題に対応できる有用な回民人材，すなわち「念書的」の育成を目指して，各地のモスク内に新式学校，職業訓練学校や福祉センターを設立し，回民の近代教育と職業訓練・生活支援を始めたのである。定期刊行物の購読を通じて時事問題への理解を深めることも，推奨された[19]。

北京では，1906～07年のメッカ巡礼と中東の諸都市訪問を終えた牛街出身の王寛アホン（または王浩然，1848-1919）が，奉天（現在の遼寧省瀋陽市）出身の張子文アホン（または張徳純，1875-1966）と連携しながら諸改革を進めていった。彼ら改革派アホンの宗教・社会に関する意見や活動内容を報道した日刊紙『正宗愛国報』は，北京とその周辺地域を中心に，清末民初の回民の日常生活や宗教・政治活動の実態を生き生きと伝える，貴重な史料である。

改革派アホンたちが設立した学校の大半は，資金不足，および経堂教育の伝統を重んじるアホンや郷老（ムスリム・コミュニティの管理責任者）の反対により，ごく短期間のうちに閉鎖を余儀なくされた[20]。しかし，王寛らの薫陶を受け近代教育の重要性を認識した回民のなかから，1920年代以降に宗教・教育・政治の分野で全国的に活躍するエリートが多数輩出されたことは，清末民初の華北回民による改革運動の意義を物語っている。

ここで着目すべきは，それまで回民社会で重要な地位を占めていた「念経」知識人の筆頭たるアホンや郷老だけではなく，職業ジャーナリストが改革運動のなかで大きな存在感を示したという点である。丁宝臣はアホンの資格を持っていたとはいえ，モスクで宗教職能者として働いた経験はない。劉孟揚にいたっては，おそらく宗教教育を受けたことすらなかった。劉は生員（科挙制度の郷試の受験資格を得た者のこと）であり，有名な『大公報』の編集長や天津市議会の副議長を歴任した，典型的な「念書」知識人であった。「自分は教規上，少しいい加減である」[21]と述べたことさえある。このように，宗教職能者としての就業経験を持たざる回民や，

17）（海野 2022b: 41-44）

18）経堂教育の概要は（中西2012）に簡潔にまとめられている。

19）（海野2021: 222-228）

20）丁宝臣「将来之阿衡」『正宗愛国報』第1382号，1910年10月15日，4頁；（海野2021: 226, 228-230）。

21）劉孟揚「再敬告同教諸父老」『正宗愛国報』第959号，1909年8月6日，1頁。

必ずしも敬虔ではないと自覚する回民が，新聞発行や記事執筆を通じて同教者の世論形成に大きな役割を果たしたという事実は，近代回民社会の構造変容を考える上で興味深い。

話を王寛に戻そう。教育改革を主導した王寛と，その叔父で同じく牛街モスクの教長（アホンの資格を持ち，特定のモスクに所属する宗教指導者。イスラーム世界におけるイマームのこと）を務めた経験のある王友三アホンは，クルアーンの教えから「逸脱」した中国イスラームの風俗習慣や儀礼方法を正すために，宗教改革を推進した。彼らが提唱した改革の重要項目は，①葬儀を執り行う者は靴を脱ぐ，②鳥類の内臓の内容物を先に取り除いてから調理を開始する，③喪中の家で提供された食事には手をつけない[22]ことなどである。つまり，清潔さを重んじるイスラーム本来の食・衛生習慣に立ち返るべきである，というのが王寛ら改革派（新行派とも）の趣旨であった。

だが，変革を望まない人々（旧派，古行派とも）は，王寛の一元的な教義解釈や，彼の強引ともいえる改革手腕に強く反発したという[23]。王の教育改革を支持し，ことあるごとに彼への敬意を示していた丁宝臣ですら，新旧両派の激しい対立はムスリム社会の分断につながる恐れがあると，『正宗愛国報』紙面で警鐘を鳴らしていた[24]。丁が王の旧派に対する厳しい態度に懸念を抱いていた可能性は高く，改革派と呼ばれる回民たちは決して一枚岩ではなかったと推量される。

2. 北京回民にとっての義和団事件

それでは，20世紀初頭の北京で芽生えた教育・宗教改革の動きは，義和団事件によってどのような展開を迎えたのか。本節は，回民知識人の動向やオスマン帝国との関係に留意しながら，義和団事件が北京回民社会に与えた影響を考察する。

2.1. 王寛と王友三の名声

義和団事件は，北京の回民知識人，とりわけ数年後に改革運動を主導することになる王寛にとって，盛名を馳せる契機となったようだ。

漢語の読み書きを苦手としていた王寛はほとんど文章を残さなかった[25]ため，弟子の尹伯清が1935年にムスリム雑誌『月華』（1929–48，アラビア語タイトルは*Naḍārat al-Hilāl*）に寄稿

22）「回教衝突」『正宗愛国報』第1128号，1910年1月23日，5頁。これらの改革項目は，17世紀に山東出身のイスラーム学者の常志美とその弟子の舎起靈が進めた改革内容（詳細は，佐口1969: 10–13）を基本的に踏襲している。清代から中華民国期に華北地域で繰り返された新旧両派の対立は，暴力沙汰やモスクの分裂に発展することもあった（佐口1969: 4）。

23）「回教衝突」『正宗愛国報』第1128号，1910年1月23日，5頁。

24）「阿衡開明」『正宗愛国報』第1213号，1910年4月28日，4頁。

25）張子文の息子である故・張巨齢氏の証言（2014年8月17日，北京の張氏宅でのインタビュー）。実際に，王寛の名を冠した文章の多くは，モスクでの演説内容の書き起こし文が大半を占める。

した回想録「王浩然阿訇伝略」に依拠すると，清光緒26年庚子（1900年），「扶清滅洋」を大義名分に掲げる「拳匪」（義和団）の暴力と，外国軍出兵に恐れをなした西太后らの逃亡より混迷を極める北京で，王寛は地元有力者に団練の結成，警備の強化，民衆への食料品配布を呼びかけるとともに，強奪を企てた者の斬首を命じるなど厳格に対応した。「北京西南部の一角（筆者注：牛街とその近隣地域）だけが安全を確保することができたのは，アホンの力によるものだ」と尹は述べている。やがて，「徳使克林徳」（清国兵に殺害されたドイツ公使ケテラー Clemens von Ketteler を指す）の報復のために外国兵が民衆を虐殺するらしいという噂が流れ，人々は恐怖におののいた。王寛は叔父の王友三アホンとともに英国軍の拠点に赴くと，両アホンに敬意を示した同軍の「印度回兵」（インド人のムスリム兵）を通じて，将校との面会を果たす。将校は噂が事実ではないことを王寛らに伝え，民心をかき乱さないよう軍内に指令を出した。以降，王寛の名声を聞きつけた清の宗室関係者や政治家がモスクを訪れて，国事にかかわるさまざまな案件の仲介を彼に依頼するようになったという[26)]。

義和団の暴力・略奪行為から人々を守った王寛と王友三への賛辞は，王寛が教長を務めた経験のある牛街礼拝寺（モスク）敷地内に現存する碑文にも確認される[27)]。

尹伯清の回想録やモスク内の碑文には，誇張された部分がないわけではないだろう。事実誤認もあるかもしれない。それでも，これらの記述からは，北京回民たちが両アホンの義和団事件への対応を称賛する様子が伝わってくる。また，清宗室関係者や政治家が王寛に諸事の仲裁を依頼するようになったという尹の証言も，あながち的外れなものではなさそうだ。後述するように，中華民国の政治家たちは，国民統合を目的とした辺境政策の責任者の一人に王寛を指名した。北京回民の尊敬を集めるのみならず，外国人にも一目置かれていたという，義和団事件以来の彼の評判によるところも大きかったのではないかと思われる。

2.2. オスマン帝国との関係

義和団事件は，回民がオスマン帝国と直接交流を持ち，同国宮廷から教育改革への支援を引き出す道筋をつけた出来事としても重要である。

オスマン帝国第34代皇帝のアブデュルハミト2世（在位1876–1909）は，凋落しつつある帝国の財政再建の起死回生策として，清との外交・通商関係樹立を切望していた。19世紀末にオスマン帝国の官僚や文人が中国を旅行し，政治・経済・軍事や現地のムスリムの様子について詳細な記録を残した[28)]のは，こうした皇帝の意向と無関係ではあるまい。

26）（尹1935: 14–15）

27）（北京市宣武区伊斯蘭教協会編2009: 214–219）所載の「王浩然王友三頌徳碑」「王友三王浩然述徳碑」。『月華』は，1925年に馬松亭アホン（1895–1992）と回民官僚の唐柯三（1882–1950）によって山東省済南市に設立された成達師範学校という近代的なムスリム教育機関が，1929年に北平（北京）で創刊した宗教雑誌である。同誌の編集長を務めた趙振武（1895–1938）は，青少年期に北京牛街で王寛に師事していた。

28）（Palabıyık 2013）は，清末中国を旅行したオスマン帝国出身者の中国認識を明らかにしている。

アブデュルハミト2世が回民に強い関心を抱いたきっかけの一つは，義和団事件の最中に多数の外国人を襲撃した清朝廷直属の武衛軍，いわゆる甘軍の躍進である。甘軍は，1895年に甘粛と青海で発生したムスリム反乱（いわゆる第三次河湟事変）を平定するために，甘粛省（現在は寧夏回族自治区）固原出身の軍人，董福祥が西北地域のムスリムを招集して創設した，甘粛回民を主力とする軍事集団として知られる。董自身は，回民ではなく漢人であったという説が有力である[29)]。

義和団事件制圧のため北京に派遣された甘軍に恐れをなしたドイツ皇帝のヴィルヘルム2世（在位1888～1918年）は，かねてより親交のあったアブデュルハミト2世に助けを求めた。ヴィルヘルム2世は，イスラーム世界の最高権威者たるカリフを兼ねるオスマン帝国皇帝であれば，中国のムスリムを説得し撤退させることができると思ったのだろう。ドイツに貸しをつくりたいオスマン帝国は，1901年に救援艦隊を中国に派遣した。このときすでに騒乱は収束していたが，この一件を通じて，アブデュルハミト2世は強固な団結力と軍事力，広範なネットワークを持つ回民に利用価値を見出し，オスマン帝国と清の仲介を期待するようになったらしい[30)]。

1907年，中東遊歴中の王寛をイスタンブルの宮殿で歓待したアブデュルハミト2世は，王の帰国にあわせて二人のイスラーム学者（アリー・ルザとハーフズ・ハサン）を中国に派遣した[31)]。彼らは，オスマン帝国の援助を受けて王寛が1908年に牛街モスク内に設立した新式学校（京都牛街清真西寺公立両等小学堂）で，回民子弟向けにイスラームの基礎知識を教えたという[32)]。アブデュルハミト2世の名を冠したDâr'ül-Ulûmi'l-Hamidiyye（ハミードの知の館）という同校の名称は，オスマン帝国との関係を示唆している[33)]。

オスマン帝国出身の2人のイスラーム学者は，回民教育に携わる傍ら，中国各地を旅して経済・政治情報を収集し[34)]，清の税関職員や実業家との交流を重ねる[35)]など，産業スパイ活動と疑わしき行動をとっていた。平時は王寛の教育改革を『正宗愛国報』紙上で高く評価していた丁宝臣は，アリー・ルザたちの活動を支援する王に対する不快感と，オスマン帝国への警戒心を隠さなかった[36)]。義和団事件をきっかけとするオスマン帝国と回民の接近は，回民の教育改革を前進させた一方で，改革派の回民のあいだに意見の対立をもたらした側面があると言えよう。

29）董福祥と回民の関係，および甘軍の活動については，（Lipman 1997: 156, 168–169, 181–182）に詳しい。

30）（Brophy 2016: 89–90）（Sırma 1979）

31）（尹1935: 15–16）。ただし，このときオスマン帝国から派遣された使節は3人ないし4人であったという説がある（中西2014: 121–123）。

32）（Broomhall 1966（1910）: 200–201）（İbrahim1911: 537–540）。なお，1910年代前半には，ロシア帝国領内の新式ムスリム知識人（いわゆるジャディード）が，北京をはじめとする中国の諸都市で女子生徒を含む回民子弟に近代的学問やイスラーム諸学を教授していた（Yamazaki 2018: 33–34）。

33）（海野 2021: 232）（Sırma 1978）

34）（İbrahim 1911: 537–540）

35）「要得土耳其傷寒」『正宗愛国報』号数不明，1907年6月24日，3頁。

36）「土使遊歴紀聞」『正宗愛国報』号数不明，1907年7月18日，2頁。

2.3.「迷信」の排除

先述のとおり，王寛は教育改革だけでなく，「仿西方古行」（西方，すなわちイスラーム発祥の地であるアラビア半島の宗教実践に倣う）[37]を掲げて宗教改革を実行し，中国イスラームの「旧習」や「迷信」，「頽俗」（頽廃した風俗習慣）[38]の排除を試みた。

当時，北京の回民知識人のあいだでは，義和団事件を引き起こしたとされる迷信への強い拒否感が存在していたようだ。たとえば，昌鳳鳴という名の回民は，1909年に『正宗愛国報』に掲載された論考のなかで，「中国人の迷信は諸悪の根源である」「迷信を除去しなければならない」と述べたあと，中国人の迷信が「禍胎」（災いの原因）となった出来事として，「庚子年の大乱」，すなわち義和団事件を挙げる。昌は，義和団の「神異霊験」話――拳法の習得により，刀や銃による攻撃を無効化する神通力を得ることができるという，義和拳教の信仰を指すと考えられる――を人々が広めたことが，一連の騒擾の原因となったと問題視する[39]。さらに，昌は同記事のなかで，北京郊外の昌平に住む回民たちが，通りすがりの人が蛇に噛まれて死んだ場所をイスラームの聖者の墓として祀った挙句，病気平癒のご利益があると信じ，アホンを招いてクルアーンの章句を唱える様子を，「庫符雷（すなわち迷信）」と呼んで痛烈に批判した[40]。庫符雷（kufulei）は，不信仰を意味するアラビア語のkufrの漢語音写だろう。

昌平の件は，丁宝臣も別の記事のなかで取り上げている。彼は，イスラームの経典には霊験があるから聖者の墓に参詣すべきというような「邪説」は存在しない，と主張し，信者から金銭財物を騙し取る行為に不快感を示した[41]。

丁宝臣は，『正宗愛国報』紙上に迷信批判の記事をたびたび執筆・掲載した。無分別に迷信を実践する北京の回民を「真糟」（本当にひどい）と形容した[42]ほか，「風水に惑わされるのは，豚肉を食べることよりも罪深いことだ」と述べた[43]こともある。これらの記事のなかに義和団への直接的な言及は見られないものの，迷信に嫌悪感を抱いていた丁宝臣の念頭には，昌鳳鳴と同様に義和拳教があったかもしれない。

回民知識人のなかには，王寛の一元的な教義解釈が深刻な教派対立を引き起こしかねないと懸念する者もいた。それでも，義和団事件の原因となった迷信に対する昌鳳鳴ら回民の警戒心の高まりは，迷信の排除を掲げて宗教改革を進めていた王にとって追い風となった可能性が

37）「阿衡開明」『正宗愛国報』第1213号，1910年4月28日，4頁。

38）「回教衝突」『正宗愛国報』第1128号，1910年1月23日，5頁。

39）昌鳳鳴「妖由人興」『正宗愛国報』第507号，1908年4月26日，1頁。

40）昌鳳鳴「妖由人興」『正宗愛国報』第507号，1908年4月26日，1-2頁；「謡言惑衆」『正宗愛国報』第873号，1909年5月11日，4頁。

41）「謡言惑衆」『正宗愛国報』第873号，1909年5月11日，4頁。

42）「恭祭火神」『正宗愛国報』第873号，1909年5月11日，4頁。

43）「要出人命」『正宗愛国報』第834号，1909年3月2日，5頁。この記事は，北京郊外の北釗の村人は風水を妄信するがあまりモスク移転を決めた，という丁宝臣の誤解に基づいて書かれた。これを読んだ王寛，王友三をはじめとする北京の回民指導者たちは，1896年の洪水発生時に村にもたらされた土砂によってモスクが損壊したため，モスクは移転を余儀なくされたと指摘し，丁に記事の訂正を求めた（「来函」『正宗愛国報』第841号，1909年3月9日，6頁）。丁はすぐに誤りを認めている（「再誌前報」『正宗愛国報』第843号，1909年3月11日，5頁）。

ある。

3. 天津回民にとっての義和団事件

「妖術邪法」[44]を信じる義和団が各地で猛威を振るう様子を最も詳細に記録した回民は，天津で活躍したジャーナリストの劉孟揚と言って差し支えないだろう。本節は劉の視点から，義和団による破壊行為と，騒乱を鎮圧した西欧列強の勢力拡大が，天津ムスリム社会，および北京の改革派回民の一部と親しい関係にあった劉の思考や行動に及ぼした影響を検討する。

3.1. 暴力の記憶

義和団事件によって最も甚大な被害を受けた天津の回民コミュニティの一つは，現在の天津市北辰区にかつて存在した穆家庄である[45]。

ここで，穆家庄の起源を天津回民の歴史と絡めて紹介しよう。この集落の名称は，明の第3代皇帝朱棣（または永楽帝，在位1402～1424年）の護衛として仕え，天津に居を構えた浙江出身の回民軍人，穆重和によって建設されたことに由来する。彼の子孫の一部は，18世紀に天津中心部の西北角へ移住し，食品・茶葉・衣服を扱う商店や銀行の設立・経営により富を築いた[46]。清末民初の北京・天津回民の改革運動のスポンサーであった実業家の穆紫光[47]は，穆家の出である。数世紀にわたって穆一族を中心とする天津回民の繁栄を見守ってきた穆家庄は，同地の回民にとって特別な場所だと言えよう。

劉孟揚による義和団事件の記録『天津拳匪変乱紀事』によれば，その穆家庄を襲ったのは，もともと穆家庄の「土棍」（地元のごろつき，無頼集団）と対立していた丁字沽（現在の天津市紅橋区）の土棍，および彼らと結びついた「拳匪」（義和団）を合わせた「約千余人」の群衆であった。襲撃者たちは銃と刀剣を使って人々を殺害し，家屋に放火した挙句，穆家庄（の人々）は「洋人」と気脈を通じていると言って，モスクの講堂を燃やした。これを聞きつけて天津各地から集まった一，二千人の「回教人」（ムスリム）はモスクや川で沐浴し，義和団と戦う覚悟を決めたものの，「老練で慎重な」同教者に制止されたという[48]。

1900年6月に天津の大部分を占領した義和団と，義和団から天津を奪還しようとする8ヶ国連合軍の攻防により，天津城内外は大混乱に陥った。外国兵は義和団の残党勢力を見つけ出そうと躍起になっていたため，ムスリムは義和団と間違えられないように自衛手段を模索した。劉孟揚は，ムスリムだけではなく非ムスリムまでもがモスク（清真南寺）に避難したこと，義

44）（劉2000（1910）: 50）

45）穆家庄は，1951年に天斉廟という別の回族コミュニティと合併され，現在は天穆村の名で知られる。

46）（劉2007: 85–86）。穆一族の歴史については，（白2003: 331）（Dillon 1999: 36）に簡単な記述がある。

47）（張2001: 215–220）；穆紫光「穆紫光啓事」『正宗愛国報』第2326号，1913年6月20日，1頁。

48）（劉2000（1910）: 93）（劉1951（1910）: 35）

和団ではないことを示すために日本国旗をモスクの屋根に掲げるよう日本兵の指示を受けたこと，「回教文字」（アラビア文字）が書かれた白旗や白紙を各家の門扉に貼るよう英国軍所属のインド兵に勧められたこと，非ムスリムもムスリムにアラビア文字を書いてもらいそれを門扉に掲出したことなどを，記録している[49]。そのほかに，文昌宮（現在の天津市紅橋区）の南方で，キリスト教からイスラームに改宗したという崔夫妻が義和団に殺害されたとも述べている[50]。

これらの記述からは，義和団やそれと結びついた土着勢力によって天津ムスリム社会が甚大な被害を受けたこと，ムスリムが同じく過酷な状況に置かれていた非ムスリムを助けたこと，外国兵がムスリムと義和団をアラビア語識字能力の有無により見分けようとしたこと，そして劉孟揚が義和団に対して強い嫌悪感を抱いていたことがわかる。『天津拳匪変乱紀事』には伝聞内容も含まれており，劉自身が一部始終を目撃したわけではなさそうだ。だが，劉をして「痛定思痛，心傷神喪」（当時の苦痛を思い出し，心神喪失状態にある）[51]と言わしめた凄惨な暴力の記憶が彼の心に暗い影を落としつづけたことは，想像に難くない。

なお，1900年当時20代前半で，のちに成達師範学校の活動に参加することになる天津出身の王静斎アホン（1879–1949）の義和団事件体験談もまた，衝撃的である。彼は故郷の天津から師匠のいる北京に戻る際，腐乱した遺体が道端に横たわる様子を目の当たりにした。自身も外国兵に射撃され，かろうじて逃げ切ったと1930年代に回顧している[52]。

3.2. 列強支配への不満[53]

義和団を鎮圧した8ヶ国連合軍による1900年7月の天津城陥落後も，市井の人々の苦難は続いた。

連合軍が結成した臨時政府，すなわち天津都統衙門は，天津とその周辺地域を統治するために，徴税・司法制度の刷新，公衆衛生状況の改善，街道や運河の整備，近代的な交通機関の導入を進めた[54]。1902年8月の袁世凱による接収完了により解散するまで天津都統衙門が実行したこれら諸政策のなかで，とりわけ民衆の不興を買ったのは，路面電車（トラム）の軌道を敷設するための天津老城の外壁取り壊しである。人々は，400年以上前に建てられたとされる歴史的建築物が失われたことを嘆いた。そのうちの一人，劉孟揚は，「義和団の乱が起こらなければ，このようなことにはならなかったはずだと皆言っていた」と悲痛な心情を吐露している[55]。

49）（劉2000（1910）: 101–102）（劉1951（1910）: 41）

50）（劉2000（1910）: 63–64）（劉1951（1910）: 15）

51）（劉2000（1910）: 105）

52）（王1937: 106–107）

53）本項の内容の一部は，以下の口頭発表の内容に依拠している：“Let Them Demolish the Mosque! Transportation Scandals and Muslim Communities in 1909 Tianjin,” Annual Conference, Association for Asian Studies（March 15, 2024）.

54）天津都統衙門の設立過程，および同機構が進めた政策の詳細に関する研究には，（森1988）がある。

55）（劉1951（1910）: 60）（吉澤2002: 285，316）

ベルギーによって導入された天津のトラムは1906年2月に一部運行が開始され，1908年9月までに4路線全てが開通した。ベルギーは8ヶ国連合軍に参加しなかったものの，1902年に天津に租界を設置することに成功。1931年に租界を返還するまでのあいだ，列強諸国による中国の半植民地化の一翼を担うことになる[56]。列強による中国の主権侵害の象徴であり，人力車夫の仕事を奪い，多数の事故犠牲者を出したトラムに対して民衆の多くは否定的な態度をとり，抗議活動を通じて「公憤」を表現することもあった[57]。

それは回民も例外ではなかった。1909年5月，清真南寺前に住む張練之という回民の9歳の子，歪毛がトラムに轢かれて非業の死を遂げる[58]と，「公憤」に駆られた街中のムスリムが次々に行動を起こした。裁判所に赴いて中国人運転手への厳罰を求める者もいれば[59]，犠牲者の1ヶ月忌に警察の許可を得てトラムを半日停車させ，アホンを招いて追悼行事を開催し，それをムスリムの「義挙」と表現する者もいた[60]。追悼行事の現場でその様子を目撃したという劉孟揚は，後日『正宗愛国報』に寄稿した記事のなかで，ムスリムの行き過ぎた「義挙」は，非ムスリムのイスラームに対する偏見や反感を生みかねない，ムスリムは怒りを抑制し非ムスリムとの揉め事を回避することによって，「イスラームの名誉」を維持すべきである，と主張している[61]。

折しも歪毛の死亡事故が起きた1909年には，天津と南京郊外の浦口を結ぶ津浦鉄路の駅やその関連施設の建設のために，ムスリムの墓地移転とモスク取り壊しを計画した英国・ドイツ資本の鉄道会社や政府当局に対して，回民が請願・抗議活動を繰り広げていた[62]。劉孟揚は鉄道会社責任者たちの汚職をジャーナリストとして追及する傍ら[63]，（おそらくは義和団事件発生時を想起して）ムスリムが非ムスリムによる偏見・暴力にさらされることの懸念から，請願・抗議活動を止めて当局に恭順な態度をとるよう同教者に求めた。ムスリムへの誹謗中傷を防ぎ，天津経済を発展させるために，モスク取り壊しに賛同すべきだとまで主張している[64]。そのため，一部の郷老から「お前はムスリムではない」と罵声を浴びせられたこともあるという[65]。

56）ベルギーの中国進出と天津へのトラム技術導入の過程については，（吉澤2002: 283–288）を参照。

57）（吉澤2002: 288–292, 312）（Li 2020: 123–189）

58）「軋斃可慘」『大公報』第2456号，1909年5月24日，第1張第4版；「罪究在誰」『大公報』第2458号，1909年5月26日，第1張第5版。

59）「軋斃三誌」『大公報』第2459号，1909年5月27日，第1張第4版。

60）「俯順民情」『正宗愛国報』第919号，1909年6月27日，4頁。

61）劉孟揚「敬告回教諸親友」『正宗愛国報』第948号，1909年7月26日，1–2頁。

62）1909年5月から8月頃まで，『正宗愛国報』には天津回民の請願・抗議活動の詳細を伝える複数の記事が掲載されている（たとえば，「回民攔輿」『正宗愛国報』第876号，1909年5月14日，5頁など）。裁判所への請願のために北京を訪れる天津回民に，北京回民が宿泊先と食事の提供を申し出ることもあったようだ（「預備大鍋」『正宗愛国報』第877号，1909年5月15日，4頁）。

63）「直隷官紳挽救津浦路事問題」『申報』第13079号，1909年7月4日，第1張第4–5版。関連記事が『申報』第13073，13074，13075，13076号などにも掲載されている。墓地移転を阻止するため奔走した劉孟揚の一連の行動については，彼の来孫がまとめた私家本の記述（劉2018: 276）が参考になる。

64）劉孟揚「敬告同教諸父老」『正宗愛国報』第955号，1909年8月2日，1–2頁。

65）劉孟揚「再敬告同教諸父老」『正宗愛国報』第959号，1909年8月6日，1頁。

結果的に，劉孟揚によって汚職を暴かれた鉄道会社責任者らが懲戒処分を受け，鉄道敷設計画が変更されたことにより，天津の回民コミュニティは墓地移転とモスク取り壊しを免れることができた。しかし，回民の請願・抗議活動に反対した劉への批判が巻き起こったことは，当時存在感を増しつつあった「念書」知識人の回民コミュニティにおける立場の脆弱さを露呈する格好となった。

おわりに

義和団による暴力が華北各地で猖獗を極めた20世紀初頭は，「念経」知識人を輩出してきた従来の経堂教育のあり方が見直され，近代的価値観を重視するアホンや「念書」知識人が協力して教育・宗教改革に着手した，ムスリム社会の変革期に重なる。北京の改革派回民の一部，特に宗教指導者の王寛らにとって義和団事件は，自らの名声を高め，オスマン帝国との関係を深化させ，迷信批判の風潮を形成する契機となった。他方，北京とは対照的なのが，外国人の手先と見なされた回民のコミュニティが襲撃された挙句，暴動を鎮圧した列強諸国による半植民地的支配が加速した天津である。城壁の取り壊し，鉄道敷設に伴う墓地移転・モスク取り壊し計画，トラムによる死亡事故の多発は，回民の反発を招いた。

もちろん，義和団事件が北京の人々にもたらした被害や，列強支配に対する北京回民の不満を軽視すべきではない[66)]。だが，混乱を逆手にとって教育・宗教改革に利用した北京の回民と，回民が暴力の標的となった上に天津総理衙門の統治により都市生活が大きく変容させられた天津の回民とでは，義和団事件のとらえ方に差があったとしても不思議ではなかろう。劉孟揚が非難を浴びせられてもなお，非ムスリムとの摩擦を避けるよう同教者を幾度も説得したのは，わずか数年前に起きた義和団事件によるトラウマが呼び起こされたからだと考えられる。

つまり，おそらくは騒乱の最中に体験した暴力の熾烈さゆえ，天津の回民知識人は北京の回民知識人以上に，非ムスリムからの評価を気にしがちであった。こうした傾向は，1912年1月の中華民国成立後の「回」概念をめぐる両都市出身の回民知識人の議論にも見出すことができる。清末民初の「五族共和論」における「回族」は，中国内地の漢語を話すムスリム（漢回，回民）ではなく，清代以降「回部」「回疆」と呼ばれてきた新疆に暮らすテュルク系ムスリム（纏回）を指す言葉であった。だが，西北地域のムスリムと中華民国政府の橋渡し役を王寛ら在京回民指導者に期待した孫文や袁世凱の思惑もあって，王寛は五族国民合進会という公的機関に回族代表として参加し，辺境政策を担う政府機関の蒙藏事務局が1913年1月に創刊したプロ

66）（北京市宣武区伊斯蘭教協会編2009: 218–219）所載の「王友三王浩然述德碑」によれば，北京でも，1902年に鉄道（おそらくフランス・ロシア資本の京漢鉄路を指す）敷設に伴う三里河のムスリム墓地取り壊し計画が浮上したものの，王友三と王寛が清朝政府の責任者と協議したおかげで，墓地を迂回することが決まったという。この出来事は，本稿で言及した津浦鉄路の駅・関連施設の建設に伴う天津のムスリム墓地移転・モスク取り壊し計画，およびそれに対する回民の対応と比較して，今後詳らかにされるべきだろう。

パガンダ雑誌『回文白話報』の執筆・編集にも，張子文とともに携わった。これに猛然と反発したのは，劉孟揚である。彼が漢語を話すムスリムは漢人の宗教集団であり，単一の民族ではないから，回族ではなく「清真教人」と呼ぶべきだと主張したのは，回族としての特別待遇を受けることによって漢人の反感を買うことを恐れたためだろう[67]。

ただし，北京・天津回民知識人の義和団事件への対応に相違が見られるとは言え，両都市の回民社会を完全に切り離して論じるべきではない。その理由の一つは，北京・天津間を行き来した回民がいたためである。たとえば，アホンが各地のモスクを転々とする中国イスラームの伝統に従い，王友三や王静斎は両都市のモスクでの勤務経験を持っていた。北京出身の丁宝臣は，実兄で同じくジャーナリストであった丁竹園（丁子良とも，1870？-1932）が天津に住んでいたため，しばしば天津を訪れていた。丁宝臣と丁竹園をはじめとする何人かの北京出身の回民が，回族代表として政治参加する王寛を痛烈に批判したのは，日頃から交流のあった天津出身の劉孟揚に影響を受けていたからかもしれない。彼らは1912年7月に馬鄰翼（会長），王寛・王友三（ともに副会長），張子文（評議部長）らが設立した，中国ムスリムによる史上初の全国的組織である中国回教倶進会の名称に不満を抱き，回族を連想させる「回教」の代わりに「清真教」という語を用いるべきだと同会に抗議した[68]。

こうした近代華北地域で活躍した回民ジャーナリストの言説や政治活動，都市や地域の垣根を超えた彼らの広範なネットワークについては，いずれ稿を改めて論じたい。また，義和団事件発生時の天津でムスリムが非ムスリムを匿ったことが，両者の関係にどのような影響をもたらしたのか，あるいはこの出来事が何の影響ももたらさなかったのであれば，それはなぜか。これも今後検討すべき課題である。

付記

本研究は，JSPS科研費（課題番号23K12292）の成果である。

参考文献

漢語

白寿彝『中国回回民族史』北京：中華書局（全2巻），第1巻，2003年。

北京市宣武区伊斯蘭教協会編『清真古韻：北京牛街礼拝寺』北京：文物出版社，2009年。

大公報社『大公報』初版1902-1949年，再版，北京：人民出版社；香港：商務印書館香港分館

67）劉孟揚「劉孟揚致五族合進会北京総会会書」『正宗愛国報』第1953号，1912年5月30日，6頁；（海野2022b: 37，39）。

68）「清真教不是異族人」『正宗愛国報』第1852号，1912年2月9日，5頁；共和国民「回教回族弁」『正宗愛国報』第1901号，1912年4月8日，1-2頁；丁竹園「敬告回教倶進会」『正宗愛国報』第2004号，1912年7月21日，1-2頁。丁兄弟や劉孟揚の猛烈な批判にもかかわらず，中国回教倶進会は，1930年代半ばに解散するまで，清真教ではなく回教の名称を使い続けた。

（全164冊），1983年。
姜立勛・富麗・羅志発編著『北京的宗教』天津：天津古籍出版社，1995年。
李興華「北京伊斯蘭教研究」『回族研究』53，65–74頁，2004年。
良警宇『牛街：一個城市回族社区的変遷』，北京：中央民族大学出版社，2006年。
劉金明「天津歴史文化発展中的回族因素」『黒竜江民族叢刊』2007年3期，84–87頁，2007年。
劉孟揚『天津拳匪変乱紀事』中国史学会編『義和団』上海：神州国光社（全4巻），第2巻，1951（1910）年。
劉孟揚『天津拳匪変乱紀事』四庫未收書輯刊編纂委員会編『四庫未收書輯刊』北京：北京出版社（全301巻），4輯 16冊，2000（1910）年。
劉遠『劉孟揚文集』天津：私家本，2018年。
馬景『民国時期伊斯蘭教漢文訳著研究』北京：社会科学文献出版社，2014年。
申報社『申報』初版1872–1949年，再版，上海：上海書店（全400冊），1983–1987年。
王東平「『岡志』中反映的明清北京牛街回族社会的族群関係」『回族研究』79，69–74頁，2010年。
王静斎「五十年求学自述」『禹貢』7（4），105–114頁，1937年。
尹伯清「王浩然阿訇伝略」『月華』7（24），14–16頁，1935年。
張巨齢『緑苑鈎沈』北京：民族出版社，2001年。
正宗愛国報社『正宗愛国報』初版1906–1913年，再版，北京：中華全国図書館文献縮微中心編，1987年。

日本語

海野典子「経堂教育と新式教育：20世紀初頭の北京ムスリムの教育改革をめぐる議論と実践」高尾賢一郎他編『宗教と風紀：〈聖なる規範〉から読み解く現代』東京：岩波書店，222–242頁，2021年。
海野典子「日本人が見た中華民国期北京のムスリム社会：雑誌『回教』と画集『回回風俗図』を手がかりとして」小野亮介・海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，327–364頁，2022年（a）。
海野典子「清末民初期の北京における食・衛生・宗教：中国ムスリムの「清真」意識とハラール問題への対応」『歴史学研究』第1027号，37–47頁，2022年（b）。
王柯『20世紀中国の国家建設と「民族」』東京：東京大学出版会，2006年。
蒲豊彦「義和団事件前夜のキリスト教会」『東洋史研究』75（2），414–380頁，2016年。
佐口透「中国イスラムの近代主義」『金沢大学法文学部論集』16，19–44頁，1968年。
佐藤公彦『義和団の起源とその運動：中国民衆ナショナリズムの誕生』東京：研文出版，1999

年。
中西竜也「経堂教育：清真寺におけるイスラーム教育」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』東京：明石書店，157-161頁，2012年。
中西竜也「20世紀初頭オスマン語による中国のムスリム事情紹介」杉山正明編『続・ユーラシアの東西を眺める』京都：京都大学大学院文学研究科，119-160頁，2014年。
松本ますみ『中国民族政策の研究：清末から1945年までの「民族論」を中心に』東京：多賀出版，1999年。
森悦子「天津都統衙門について：義和團戰爭後の天津行政權返還交渉を中心に」『東洋史研究』47（2），314-343頁，1988年。
吉澤誠一郎『天津の近代：清末都市における政治文化と社会統合』名古屋：名古屋大学出版会，2002年。

その他外国語

Bickers, Robert A., and Rolf G. Tiedemann. eds. 2007. *The Boxers, China, and the World*. Lanham: Rowman & Littlefield.
Broomhall, Marshall. 1966（1910）. *Islam in China: A Neglected Problem*, New York, NY: Paragon Book Reprint Corp.
Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier.* Cambridge: Harvard University Press.
Cieciura, Wlodzimierz. 2016. “Ethnicity of Religion? Republican-Era Chinese Debates on Islam and Muslims,” *Islamic Thought in China: Sino-Muslim Intellectual Evolution from the 17th to the 21st Century,* ed. by Jonathan N. Lipman, Edinburgh: Edinburgh University Press, 107-146.
Dillon, Michael. 1999. *China's Muslim Hui Community: Migration, Settlement and Sects*. London: Curzon Press.
Esherick, Joseph W. 1987. *The Origins of the Boxer Uprising*. Berkely: University of California Press.
Hartmann, Martin. 1913. “Vom Chinesischen Islam［On Chinese Islam］,” *Die Welt des Islams* 1（3/4）, 178-210.
İbrahim, Abdürreşid. 1911. *‘Âlem-i İslâm ve Japonya’da İntişâr-ı İslâm.* İstanbul: Aḥmed Sâḳî Bey Maṭba‘ası（2 vols）, Vol 1.
Li, Kan. 2020. “On the Road to A Modern City: New Transportation Technology and Urban Transformation of Tianjin, 1860-1937.” Unpublished doctoral dissertation, University of Minnesota.
Lipman, Jonathan N. 1997. *Familiar Strangers: A History of Muslims in Northwest China*. Seattle:

The University of Washington Press.

Lipman, Jonathan N. 2006. “‘A Fierce and Brutal People’: On Islam and Muslims in Qing Law,” *Empire at the Margins: Culture, Ethnicity, and Frontier in Early Modern China*, ed. by Pamela Kyle Crossley, Helen F. Siu, and Donald S. Sutton, Berkeley: University of California Press, 83–110.

Naquin, Susan. 2000. *Peking: Temples and City Life 1400–1900,* Berkeley: University of California Press.

Palabıyık, Mustafa S. 2013. “The Ottoman Travellers’ Perceptions of the Far East in the Early Twentieth Century,” *Bilig* 65, 285–310.

Rhodes, Frederic Herbert. 1921. “A Survey of Islam in China,” *The Moslem World* 11, 53–68.

Sırma, İhsan S. 1978. “Pekin Hamidiyye Üniversitesi［Beijing’s Hamidiyye University］,” *Prof. M. Tayyib Okiç Armağanı*. Ankara: Sevinç Matbaası, 159–170.

Sırma, İhsan S. 1979. “Sutlan II. Abdülhamid ve Çin Müslümanları［Sutlan Abdülhamid II and the Chinese Muslims］,” *İslam Tedkikleri Enstitüsü Dergisi* 8（3/4）, 199–205.

Unno（née Yamazaki）, Noriko. 2018. “Cutting off the Queue for Faith, Preserving the Queue for Face: Chinese Muslims’ Queue-Cutting Movements in North China during the Xinhai Revolution Period,” *Asian Studies* 6（1）, 11–31.

Yamazaki, Noriko. 2014. “Abdürreşid İbrahim’s Journey to China: Muslim Communities in the Late Qing as Seen by a Russian-Tatar Intellectual,” *Central Asian Survey* 33（3）, 405–420.

Yamazaki, Noriko. 2018. “20. Asrın Başlarında Pekin’deki İslam Mektepleri ve Yabancı Müslümanlar［Islamic Schools and Foreign Muslims in Beijing in the Early Twentieth Century］,” ed. by Dündar, Ali Merthan, *Abdürreşit İbrahim ve Zamanı: Türkiye ve Japonya Arasında Orta Avrasya.* Ankara: Türk Tarih Kurumu, 25–42.